

平成30年6月12日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15H03282

研究課題名(和文) 声と文字をめぐる宗教実践の研究 東南アジアと隣接地域の比較

研究課題名(英文) Orality and Literacy in Religious Practices: Comparative Studies between Southeast Asia and its Neighboring Areas

研究代表者

村上 忠良 (Murakami, Tadayoshi)

大阪大学・言語文化研究科(言語社会専攻、日本語・日本文化専攻)・教授

研究者番号：50334016

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,890,000円

研究成果の概要(和文)：声と文字に関わる宗教実践について、東南アジア地域内の比較研究と、東南アジアと隣接諸地域との比較研究を通して、(1)宗教文書をめぐる実践が常に文字と声の両実践の統合体として現れているということ、(2)声と文字に関わる宗教実践が実践者個人の営為によって継承されており、聖職者と俗人の境界を超えて循環し、共有されていること、(3)声と文字の宗教実践は、それが記録され・上演され・複製される媒体の特性に大きく影響されていること、以上の3点を明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：Comparing religious practices of Southeast Asia and comparing religious practices between Southeast Asia and its neighboring areas, this research revealed the features of orality and literacy in religious practices as follows. (1) The religious practices of the written appear in a convergence of orality and literacy, not opposition. (2) The knowledges and skills of orality and literacy in religious practices are not exclusively restricted to clergy or monks. These are circulated widely through individual acts of religious practitioners. (3) The media of the oral and the written influence the way of emergence of the sacred in religious practices.

研究分野：文化人類学

キーワード：文化人類学 宗教学 オーラリティ リテラシー 東南アジア 地域間比較

1. 研究開始当初の背景

文字(聖典・経典)を有する世界宗教の世界規模の展開と受容の過程はこれまで多くの研究者の関心をひいてきた。しかし、先行研究の問題設定の多くは、(聖典・経典に書かれた)「正しい教え」の受容過程あるいは「聖典・経典がもたらした影響」についての考察が中心であり、受容した当事者の主体性を十分くみ取ってきたものとは言い難い。

仏教、ヒンドゥ教、キリスト教、イスラームの聖典(経典)とともに新たに東南アジアにもたらされた文字は、「書かれたもの」の聖性(正統性)を生み出し、宗教的な領域を超えて、人々の歴史意識や民族意識にも大きな変革をもたらしたと考えられる。

しかし、その一方で、東南アジアでは声から文字へ、紙から電子メディアへ、秘匿から公共へ、あるいは呪術から合理的精神へとといった従来の一方通行の発展モデルが当てはまらず、歌や語り、刺青・護符、写本、印刷物、電子メディアなど、宗教に関するメディアの「同時共存状態」がある。さらに、宗教における声と文字は、単に宗教的メッセージを伝達するメディアであるのみならず、身体行為と一体となった宗教実践そのものでもある。

近年、宗教学の中からも「宗教実践の中での聖典・経典」という観点から聖典・経典を捉えなおす研究が出てきており(Graham 1987, Griffiths 1999)、またヨーロッパ史の研究においても、聖書や書物の実践形態に注目した研究がなされてきている(Stock 1983, 大黒 2010)。これらの研究は、従来の聖典・経典を再考するという点で高く評価できるが、書かれたものの相対化の契機として宗教実践を措定している点で、依然としてテキスト中心的な傾向を帯びている。

一方、人類学・民俗学における「文字の文化」の研究(Goody 1968, Boyarin 1992, 笹原 2009)、リテラシーを声と文字の関係から考察するグディヤオングの研究(Goody 1986; 1987, オング 1991)、そしてテキストや書承文化に関する人文系研究者の共同研究(齋藤 2009, Kashinaga 2009)は、書かれたもの(文字)とその運用形態や機能の多様な相を明らかにしてきた。しかし、これらの研究ではリテラシー全般への理解が中心課題であり、宗教実践に関わるリテラシーはその一分野を構成しているに過ぎず、その特徴が十分に明らかにされているとは言えない。

研究代表者は、京都大学地域研究統合情報センターの共同研究「宗教実践における声と文字 東南アジア地域からの展望」(平成 25~26 年度)に参加し、そこでの討議を通して、「宗教実践のなかの聖典・経典」と「オーラリティとリテラシーの多様な相」という新たな研究課題を得た。この研究課題を、東南アジアと隣接地域との比較研究によって発展させるのが、本研究である。

2. 研究の目的

本研究では、宗教実践において人が発する「声」と読み書きされる「文字」の特徴を、以下の研究課題に沿って明らかにすることを目的とした。

(1)身体行為の重要性(共通課題):「となえる」・「よむ」・「うたう」・「かたる」・「きく」・「きざむ」・「かく」・「みる」・「おがむ」・「つたえる」といった宗教における声や文字の実践が有する力の生成の過程や仕組みを明らかにする。

(2)声と文字からみるリテラシー(個別課題):宗教実践において文字がもつ意味は、聖典語や俗語の文字知識の有無という単純な指標では測れず、読めるが書けない「識字者」・聴くことでテキストを享受する大衆、読書によって新たに生み出される語りなど、文字と声の複雑な関係を明らかにする。

(3)メディア間の相互関係(個別課題):声と文字は単に相互関係を持つだけではなく、さらに図像、絵画、演劇、音楽、聖像・聖遺物との関係へも開かれている。声と文字をめぐるメディア間の協働関係を明らかにする。

(4)文字と歴史性(個別課題):文字に書かれたものから歴史を読み解いていくのは歴史学の作業であるが、本研究では、文字に関わる身体行為が、過去の出来事を聖化し、意味を付与するプロセスを明らかにし、人々の歴史意識・民族意識に与える影響を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究の研究方法の特徴は以下の2点である。第1点目は、東南アジア地域内、隣接地域間の比較研究をすることで、世界宗教の系統にとらわれない声と文字に関わる宗教実践の特徴を明らかにすることである。これまで宗教上のリテラシーに関する人類学的研究は、インド(文献)学・仏教学・キリスト教学・イスラーム教学という世界宗教の「大本」(おおもと)の研究が、あるいは他地域の同系統の宗教の受容形態を取り扱う人類学的研究との比較対照を通して、その地域の世界宗教の受容形態の特徴を測ってきた。本研究ではこれらの研究成果を前提として参照しつつも、そこに留まらず、地域内・地域間比較によって共通の構造を明らかにする。

第2点目として、文化(社会)人類学の研究者に加えて、歴史学、インド学、文学を専門とするメンバーによる研究分野横断的な研究メンバーを構成した。研究対象を歌謡・演劇・文学・歴史資料にまで広げることにより、声と文字をめぐる宗教実践の全体像を把握することができる。また、地域内・地域間・宗教間の比較研究のため、東南アジアをフィールドとする研究者に加えて、東アジア、南アジアの研究者も加えた。

研究プロジェクト全体の共通課題を「(1)身体行為の重要性」とし、「(2)声と文字からみるリテラシー」・「(3)メディア間の相互関

係」、「(4)文字と歴史性」の3つを個別課題とし、これらのうち一つ以上の個別課題に関して、各メンバーが資料収集・調査とデータ分析を行い、その成果を研究集会において報告し討議を行った。各メンバーは本研究課題に取り組むための「入り口」としてこれら3つの課題の内の1つを中心的に取り上げるが、それと同時に、他の個別課題との関係を射程に入れて考察を発展させていった。

4. 研究成果

(1) オーラリティとリテラシーの輻輳

東南アジアの上座仏教徒諸民族の仏教文書朗誦文化、漢文經典の朗誦、山地民の憑依と歌謡、日本の真宗門徒の經本の実践の研究から、宗教文書をめぐる実践は、常に文字と声の両実践の統合体として現れていることが明らかとなった。「經典」「聖典」は、朗誦・拝聴といった口頭・口承の活動を通して広く社会の中に浸透していく。

さらに「經典」「聖典」の実践では、口頭・口承だけではなく、身振り・演技などの身体全体を使ったパフォーマンスも伴うことが顕著にみられる。そのため、宗教実践における声と文字に関わる活動では、黙読によるテキストの内的な鑑賞や感情・思考をテキストとして記述することを前提とした近代的リテラシーとは異なる知識・技能が求められていることを明らかにできた。

(2) 声と文字に関わる知識・技能の循環

「經典」「聖典」の宗教実践は、聖職者と俗人の境界を超えて共有されており、その継承には、寺院・教会・モスクなどにおける聖職者の教育・修業だけではなく、俗人の活動も大きな役割を担っている。「經典」や「聖典」がそれ自体で聖性を生み出す源泉となるため、「經典」や「聖典」を上演する技能を持つことで、俗人であっても「經典」「聖典」が表す宗教的世界にアクセスすることが可能となることを明らかにした。

(3) 媒体の特性

身体に刻まれる刺青、映像に記録される朗誦儀礼、聖像にまつわる奇跡譚の文書、中世文学作品の演劇化の研究から、声と文字の宗教実践は、それが記録され・上演され・複製される媒体(メディア)のもつ特性に大きく影響されていることが明らかとなった。声や文字の宗教実践では、モノ・コト・コトバが一つの連鎖として構成されており、声・文字を成立させるモノや身体といった媒体との相互関係の重要性が明らかとなった。

本研究で得られた成果の一部を、東南アジア学会第95回研究大会のパネル「宗教実践における声と文字 東南アジア大陸部から考える」(2016年6月)、国際研究集会 Southeast Asian Studies in Asia Conference 2017 "Unity in Diversity: Transgressive Southeast Asia" のパネル "Orality and Literacy in Southeast Asian Religions" (2017年12月)として報告した。

引用文献

- Boyarin J. 1992. *The Ethnography of Reading*, University of California Press
- Goody, J. ed. 1968. *Literacy in Traditional Society*, Cambridge University Press.
- Goody, J. 1986. *The Logic of Writing and the Organization of Society*, Cambridge University Press
- Goody, J. 1987. *The Interface between the Written and the Oral*, Cambridge University Press.
- Graham, W. A. 1987. *Beyond the Written Word*, Cambridge University Press.
- Griffiths, P. J. 1999. *Religious Reading*, Oxford University Press.
- Kashinaga, M. ed. 2009. *Written Culture in Mainland Southeast Asia*, National Museum of Ethnology, Osaka.
- 大黒俊二. 2010. 『声と文字』岩波書店。
- オング, W. J. 1991 (1982). 『声の文化と文字の文化』藤原書店。
- 齋藤晃編. 2009. 『テキストと人文学』人文書院。
- 笹原亮二編. 2009. 『口頭伝承と文字文化』思文閣出版。
- Stock, B. 1983. *The Implications of Literacy*, Princeton University Press.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計23件)

村上忠良、シャンの在家仏教徒朗誦の特徴 タイ国内の仏教文書朗誦との比較より、年報タイ研究、査読有、18号、2018、印刷中

吉野晃、タイ北部のミエンにおける歌と歌謡語(3) 「過山榜圖」発音と注釈、東京学芸大学紀要 人文社会科学系、査読無、69号、2018、73-84

川田牧人、落語と宗教の・ようなもの、日本常民文化紀要、査読無、33号、2018、67-103

YOSHIMOTO Yasuko、Preliminary study of Kitap of the Cham: Description of Kitap Du-A Muk Kei - the ancestor's prayer book of Cham Bani、Comparative Study of Southeast Asian Kitabs、査読無、5、2018、1-15

KITADA Makoto、Music Therapy Mentioned in the Sarmayah-i Israt, an Urdu Treatise on Sitar Playing、Traditional South Asian Medicine、査読無、9、2017、120-135

池田一人、ミャンマーにおけるカレン民族問題の起源とタキン史観に関する覚書、*Ex Oriente*、査読有、24号、2017、27-61

吉野晃、タイ北部のミエンにおける歌と歌謡語(2) 『後生娘子歌』発音と注釈、東京学芸大学紀要 人文社会科学系、査読無、68号、2017、47-58

津村文彦、美しくも、きたないイレズミタイのサクヤン試論、年報タイ研究、査読有、16号、2016、39-60

片岡樹、架空の識字力 現代タイ国における漢文經典の知識をめぐる、華僑華人研究、査読有、13号、2016、7-26

吉野晃、歌の詠唱法と儀礼への応用 - タイ北部、ユーミエン(ヤオ)の新たな宗教、東京学芸大学紀要 人文社会科学系、査読無、67号、2016、105-112

村上忠良、「パオ仏教」の創出? ミャンマー連邦シャン州の民族と仏教の境界、東南アジア研究、査読有、53巻1号、2015、44-67

小島敬裕、山地民パラウンの越境と仏教実践の独自性 ミャンマー・シャン州ナムサン周辺地域の事例から、東南アジア研究、査読有、53巻1号、2015、9-43

[学会発表](計44件)

KATAOKA Tatsuki、Literacy as Charisma: 'The Lost Book' and Prayer of the Lahu in Thailand and Burma、Consortium for Southeast Asian Studies in Asia Conference 2017、Chulalongkorn University, Bangkok, Thailand

KOJIMA Takahiro、Lay Experts in Reciting Buddhist Texts in Contemporary Myanmar、Consortium for Southeast Asian Studies in Asia Conference 2017、Chulalongkorn University, Bangkok, Thailand

MURAKAMI Tadayoshi、Shan Lay Buddhist Recitation in Northern Thailand: Comparing Lik Long and Thammachakya、Consortium for Southeast Asian Studies in Asia Conference 2017、Chulalongkorn University, Bangkok, Thailand

TSUMURA Fumihiko、Rishis in Northeastern Thailand: Brahman Religious Practices under Buddhism、Consortium for Southeast Asian Studies in Asia Conference 2017、Chulalongkorn University, Bangkok, Thailand

村上忠良、タイ国北部におけるシャン仏教徒のタンマチャッカー朗誦 東南アジア大陸部上座仏教徒の声と文字の実践研究、日本文化人類学会第51回研究大会、2017年、神戸大学

KITADA Makoto、Nepalesische Tradition des Tanztheaters: Der Kärtik Nac des Pharping、Mitteldeutscher Südasiensstag、2017、ドイツ・ハレ大学

村上忠良、タイ系民族の仏教文書文化からみたシャンの在家朗誦、東南アジア学会第95回研究大会、2016、大阪大学

片岡樹、タイにおける漢文經典朗誦、東南

アジア学会第95回研究大会、2016、大阪大学

小島敬裕、現代ミャンマーにおける在家仏教徒の朗誦専門家たち、東南アジア学会第95回研究大会、2016、大阪大学

池田一人、仏教ポー・カレン文字の成立過程とプータマイツ伝説の再検討、東南アジア学会第95回研究大会、2016、大阪大学

津村文彦、見えないタトゥーをもつこと 東北タイにおけるサクヤンにみる可視と不可視、日本文化人類学会第50回研究大会、2016、南山大学

KAWADA Makito、When orasyones meet modern literacy: Prayer in the words and writing of the Visayas, Philippines、International Union of Anthropological and Ethnological Sciences、2016、Dubrovnik, Croatia

[図書](計22件)

林行夫、他、愛知大学人文社会学研究所、功德と喜捨と贖罪 宗教の政治経済学、2018、287(157-201)

伊藤悟、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、ソンコーカオ - 徳宏タイ上座仏教社会におけるシャーマンの送靈うた、2017、432

吉野晃、他、国立民族学博物館、中国における歴史の資源化の現状と課題、2017、327(309-322)

HAYASHI Yukio, KOJIMA Takahiro et. al.、Center for Integrated Area Studies, Kyoto University、Mapping Buddhist Cultures among Theravadin in Time and Space、2017、240(1-20, 99-126)

KOJIMA Takahiro et. al.、ISEAS; Yusof Ishak Institute、Myanmar's Mountain and Maritime Borderscapes: Local Practices, Boundary-Making and Figured Worlds、2016、398(369-387)

吉野晃、他、大学教育出版、ミエン・ヤオの歌謡と儀礼、2016、347(55-71)

[産業財産権]

出願状況(計 件)

取得状況(計 件)

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

村上 忠良 (MURAKAMI, Tadayoshi)

大阪大学・大学院言語文化研究科・教授
研究者番号: 50334016

(2) 研究分担者

林 行夫 (HAYASHI, Yukio)

龍谷大学・文学部・教授
研究者番号：60208634

川田 牧人 (KAWADA, Makito)
成城大学・文芸学部・教授
研究者番号：30260110

吉野 晃 (YOSHINO, Akira)
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：60230786

山根 聡 (YAMANE, So)
大阪大学・大学院言語文化研究科・教授
研究者番号：80283836

津村 文彦 (TSUMURA, Fumihiko)
名城大学・外国語学部・教授
研究者番号：40363882

片岡 樹 (KATAOKA, Tatsuki)
京都大学・大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授
研究者番号：10513517

池田 一人 (IKEDA, Kazuto)
大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授
研究者番号：40708202

北田 信 (KITADA, Makoto)
大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授
研究者番号：60508513

小島 敬裕 (KOJIMA, Takahiro)
津田塾大学・学芸学部・准教授
研究者番号：10586382

渡部 圭一 (WATANABE, Keiichi)
滋賀県立琵琶湖博物館・研究部・学芸技師
研究者番号：80454081

吉本 康子 (YOSHIMOTO, Yasuko)
上智大学・総合グローバル学部・研究員
研究者番号：50535789

伊藤 悟 (ITO, Satoru)
京都文教大学・総合社会学部・研究員
研究者番号：90633503

(3)研究協力者

大橋 亜由美 (OHASHI, Ayumi)